

	[誤]	→	[正]
〔横組〕 8 頁下から 2 行目	「 ^刊 家庭朝日」	→	「 ^朝 家庭朝日」
〔横組〕 9 頁下から 4 行目	尊啓閣	→	尊 ^{ママ} 啓閣
〔横組〕 17 頁 2 行目	耐える得る	→	耐え得る

編輯後記

▲大学院入試のあった昨年8月18日夕方、加東市は激しい雷雨に襲われた。試験会場になっている共通講義棟で雷鳴のやむのを待っていたら、学生宿舎に落雷があったとの知らせ。落雷は大学のある旧社町地区だけかと思っていたら、旧滝野地区にある自宅もやられていた。帰宅してみると、電話機は沈黙、電気温水器からは湯が出ない、ネットで情報を手に入れようとしてもパソコンも立ち上がらない。屋外に設置していた温水器は火災保険で修理できたが、電話機とパソコンは自腹で買い換え。三軒目の電気屋さんで見つけた現品処分品のパソコンを買い（パソコンの現品処分品というのは、その場で持ち帰れないのですね）、ようやく1週間してメールもネットも使えるようになった。7月から下がった給料で心細かった私の懐には、大打撃である。

▲自宅の雷騒動は落ち着いたのだが、今度は研究室の入っている教育・言語・社会棟という建物の改修工事が始まった。床を揺るがす騒音だけではない、粉塵は舞う、天井と一緒に照明装置が外された廊下は薄暗い、片側の階段・エレベーターは使えない、時として、水は出ない、トイレは流せない、電気は止まる。廊下は「工事現場さながら」ではなく、「工事現場そのもの」である。研究室も工事現場になることがある（もともとオマエの研究室は乱雑で工事現場そのものだ、否、実際の工事現場は整理整頓されている、という声が聞こえそうだが）。年末までエアコンは停止して、しばらく毛布で震えていた。予算を取ってくることに熱心で、それを誇りにしているようだが、研究環境への配慮は甚だ疑問だ。綺麗な建物や施設も結構だが、それを使う教員・学生のが二の次になっているように思えてならない。劣悪な研究・労働環境に置かれて、下がった給料はどこへ行ったのかと素朴な疑問を持つ身には、それらしい見映えには気を遣うが、中身は二の次……近年の本質が今度の工事で顕現したのだろう（かな）と思われる。

▲工事が始まって憤懣やるかたなく過ごしていた12月半ば、今度は10年目に入っていた大学のパソコンがダウン（これは工事が原因ではありません）。以前から兆候はあって、ある程度はバックアップしていたのだが、10日分ほどの仕事とメールが消滅。それでも、何とかならぬかと再起動を繰り返してキーを連打する私の様子を見ていた友人は、「無駄やでえ」と一言。同じ状況になって買い換えたと言う。忠言に従ってパソコンを更新したら、これが、10年目に入ったプリンターに繋がらない。10年も経てば、パソコンは駄目になり、プリンターは時代遅れ。今年4月で人間を60年やったことになる私などは、よく保った方か？ 人間ドックの結果を知った主治医が、もう1種類薬を服用するべきだとの判断を下したのは去年暮れのこと。先日、大学構内のちょっとした広場の端、ちょうど石畳にさしかかる場所で躓いた。既に日が暮れていたので誰だか分からぬが、通りがかった学生に心配そうな声を掛けられた（勤務先の学生は総じてこんな気遣いができます）。蛙のように地べたに這い蹲ってしまった私の姿は、よほど憐れに映ったのだろうか。すぐに治ったものの、膝にはミシュラン擬きの三つ星の傷、石畳でこすれた掌も痛かった。なぜ躓いたか分からないが、単なる老化というのが当たっていそう。

▲論文を添削するのは本当に難しい。私が手を加えると、やたら重装備になって、軽快だったリズムが崩れる。本人は、こんな文章にしたくなかったのではないかと思います。しかし、細部の表現が論述を支えているとすれば、やはり、細かい部分が気になる。……と言いながら、自分の文章の細部が大丈夫かという、些か心許ない。堀部功氏からは前号について丁寧な御指摘を賜わり、知人からは「一人で監督、主演、撮影（ついでに、劇場のもぎり）をすべてこなしている、自主制作の映画のような味わいがあります。」と評された。今号は、パソコンの更新に手間取って期限ぎりぎりの編集作業。〈自主制作映画〉擬きの危うさを覚えずにはいられないが、御批判・御指摘を頂戴できれば幸いです。

（前田貞昭）

兵庫教育大学 近代文学雑誌 第24号

ISSN 0918-8770

〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1

兵庫教育大学大学院 教育内容・方法開発専攻

文化表現系教育コース言語系教育分野（国語）

前田研究室

TEL. & Fax. 0795-44-2083（ダイヤル）

E-mail : sadm@hyogo-u.ac.jp

印刷 株式会社フジワラ

2013年2月20日発行

（非売品）